

■登場人物

- ・兄…イカナゴ
- ・妹…アサリ
- ・墓泥棒…タヌキ
- ・帝
- ・妃
- ・臣下…アナグマ

0場 しりとりりのシーン

妹、閉じ込められている。
扉の前に兄。

兄「なあ」
妹「なあに？」
兄「しりとり、しよう」
妹「しりとり？」
兄「うん。しりとり」
妹「なんで？」
兄「いいだろ。しりとり。しよう？」
妹「うん」
兄「じゃあ、俺からな。しりとりりの「り」から。りんご」
妹「ごま」
兄「え、なに？ ごま好きなの？」※ちよつかい出すのが早すぎるか。
妹「そんなんじゃないけど、なんだっていいんでしょ？」
兄「うん。なんだっていいけど」
妹「ま」だよ
兄「ま。まりも」
妹「ももんが」
兄「ガジュマル」
妹「なに（笑う）、ガジュマルって？」
兄「ガジュマルは妖精がすんでる樹だよ」
妹「本当にあるの？」
兄「あるよ、なに、知らないの？」
妹「知らないよ」
兄「じゃあ今度見に行こう」
妹「え、本当にあるの？」
兄「あるよ。なんで嘘つくんだよ」
妹「嘘つきだから」
兄「ガジュマルについては嘘ついちゃいけないっていう、嘘つき界のルールがあるんだよ」
妹「そうなんだ。知らなかった」
兄「見に行こうな」
妹「うん。そうね」
兄「うん。約束な」
妹「なんだっけ？」

兄「ん？」
妹「最後の文字」
兄「ああ。えっと「る」
妹「る」ね。ルビー」
兄「い？ び？」
妹「うそ。「い」だろ」
兄「び」だろ」
妹「「い」だろ」
兄「「び」です」
妹「びい？ えっと。ビックリして腰を抜かした」
兄「え、そんなのあり？」
妹「ありあり。いいだろ別に」
兄「それじゃあ何でもできるじゃん」
妹「何でもできていいんだよ。しりとりなんだから」
兄「えっと、じゃあね。ただ、そこにいてくれればいいのに」

間

兄「に？」
妹「に」
兄「ニンニクを食べた口は臭い。い」
妹「いぬ」
兄「ぬ。濡れる袖。渴く眼（まなこ）。「こ」」
やや間
兄「こ？ 昆布は何故水の中ではだしを出さないんだろう」
やや間
兄「う。う？ う、嘘つきは本当のことを言わない」
やや間
兄「「い」ね？ い、、、」

(開演)
1場 酒を盗むシーン
墓泥棒が二人。
タヌキ「おい、イカナゴお。本当にこんなところにあるのかよ」
兄「あるから来てるんじゃないか」
タヌキ「でもどんだけ探したって出てこねえじゃねえか」
兄「もうちよいであるんだよ」
タヌキ「もうねえんじゃねえのか」
兄「何言ってるんだ、ばかタヌキ。もうなかったら噂なんて出回らねえだろう」

タヌキ「もうねえから噂が出回ってるんだよ」
兄「何言ってるんだ。火のないところに煙はたたねえよ」
タヌキ「だから、噂を聞きつけて俺らみたいになハカ泥棒が先に持って行っちゃまったんだよ」
兄「うるせえなバカ泥棒が。なんでもいいから、さっさと探せ」
タヌキ「だからなかつたら探したってしようがねえじゃんかよ」
兄「探さなかつたらあるもんもねえじゃんかよ」
タヌキ「ねえもんを見つけたで、なかつたことあるだろうがよ」
兄「なかつたらなかつたで、なかつたことあるだろうがよ」
タヌキ「よくわかかんねえよ。なんでそんなにむきになるんだよ。ただの酒だろ？」
兄「たあの酒じゃねえよ。神の酒だ」
タヌキ「神の酒って普通の酒なんだろう？」
兄「普通の酒じゃねえから神の酒なんだろうがよ。おめえ、噂を聞いてなかつたのか？」
タヌキ「聞いてたよ。その酒を飲むと夢の国に行けるんだろ？」
兄「そうだ。そして夢の国では思ったことがなんでも思い通りになる」
タヌキ「夢の国なんて無えよ。あれだよ、酔っつぱらつた心地を夢心地みたいな感じで夢の国って言うてるだけだよ」
兄「そんな飲んでみるまで分からねえじゃんか」
タヌキ「こんな手間をかけてまで飲むもんじゃないって言うてるんだよ」
兄「こんな手間をかけるからこそ酒がうめえんじゃないか」
タヌキ「どうしてそんなに神の酒にこだわるんだよ」
兄「夢なんだよ。昔からの」
タヌキ「がきん頃の？」
兄「ああ。物心ついた時から神の酒が飲みたくて仕方がなかった」
タヌキ「人間の酒も飲んだことないのに？」
兄「ないのに」
タヌキ「神の酒を？」
兄「神の酒を」
タヌキ「なんで」
兄「わかかんねえよそんな。忘れちゃった。おら、ぐちやぐちや言ってねえで探せよ」
タヌキ「わかつたよ探すよ。探すけどさ」
兄「なんだよ」
タヌキ「どんな形なんだよ」
兄「わかかんねえよ」
タヌキ「わかかんないなら探しようがないじゃんかよ」
兄「それを探し出すのが天才のハカ泥棒だろうがよ」
タヌキ「俺たちは変態のバカ泥棒だろ」
兄「だいたい酒なんて酒瓶に入ってるんだろが」
タヌキ「酒瓶にもいろいろなのがあるじゃんかよ」
兄「どんなのがあんだよ」
タヌキ「例えばこんなんとかさ（酒瓶を拾う）」
兄「じゃあそなんだよ。そんなんに入ってるんだよ」
タヌキ「なんでそんなにぶつきらぼうなんだよ。わかつたよこんなんを探すよ」
兄「そうだよ。さっさと探せよ、ん？ん？ん？ん？ん？ん？」
タヌキ「こんな酒瓶全然ねえよ」
兄「ん？ん？ん？ん？ん？」
タヌキ「やつばねえんだよここには」
兄「おい」

タヌキ「なに」
兄「それどこにあった」
タヌキ「わかかんねえよそこらへんに落ちてたんだから。ここら辺、何回も探したけどやつぱりないよ」
兄「おい！」
タヌキ「なんだよ！」
兄「それだよ！」
タヌキ「え？」
兄「それだよ！」
タヌキ「何言ってるんだよ。だってこれはそこらへんに落ちてたんだぜ」
兄「だから、ここに落ちてたんだろ？」
タヌキ「そうだよここに落ちてたんだから、これじゃねえかよ！」
兄「タヌキ「うわあああ！」」
兄「そうか、これが、これが神の酒なのか」
タヌキ「嘘だろ、だって、なんか、こう、乱雑な感じで置いてあったぜ」
兄「その乱雑さがたまねえんだよ。きつと黄金比で置いてあったんだよ」
タヌキ「なんだよ黄金比で置いてるって、どことどこが黄金比なんだよ！」
兄「知らねえよそんな。太陽からこの距離とここから月の距離とかが黄金比なんだよ！」
タヌキ「違うよ。だって、太陽からこの距離は大体1億5000万kmで、地球と月の距離は大体40万kmなんだから、黄金比じゃないよ」
兄「うるせえ！そんなんでいいんだよ！」
タヌキ「ごめんよごめんよ。だって俺、初めてだからさ。初めてだからさなんか興奮しちゃってさ」
兄「俺だって初めてさ」
タヌキ「嘘つけ。じゃあなんでそんなに落ち着いていられるんだよ」
兄「落ち着いてねえよ。今にも3×3×3を間違えそうだよ」
タヌキ「3×3×3はやべえよ。九九の中で一番簡単だよ。2の段より簡単だよ」
兄「そんくらい俺も興奮してるってことだ」
タヌキ「そりやマックス超えてんな！」
兄「しひて猶したふに似たる涙かな我も忘れむとおもふ夕べを（延々と繰り返し）」
タヌキ「一回落ち着こう。深呼吸。深呼吸。深呼吸しよう」
兄「わかつた深呼吸だな。いくぞ」
変な深呼吸になる。
タヌキ「やべえよ、痙攣が止まらねえよ」
兄「肺が空気を入れることを拒絶してるみたいだ」
タヌキ「水水水」
兄「ちよつとまてちよつとまて」
神の酒をくむ。
二人、神の水を手取る。
兄「いったん水を飲んで、落ち着いてから考えよう」
タヌキ「うんうんうんうん」
兄・タヌキ、神の酒を飲む。

深呼吸する。

兄・タヌキ「ふう〜……!!!」

兄・タヌキ、顔を見合わせる。

兄・タヌキ「飲んじまった〜!」

オープニング。

天幕が開き、夢の国の住人が出てくる。まるで天女たちが兄とタヌキを夢の国へ連れて行っているかの様。兄とタヌキは流れに身を任せてはけていく。夢の国の住人2人が残る。それは帝とその母。

2場 夢の国のシーン

夢の国の宮殿。

帝「ねえ、ママ」

帝の母「なあにい、ミカちゃん。あなたもいい年なんだからママって言うのやめなさい?」

帝「えー、なんでだよ。ママはいつまでたってもママのままじゃんかよ。」

帝の母「ミカちゃん? あなたは腐っても帝なのよ。この国の長なのよ」

帝「長は長でもただのおっさんだよ」

帝の母「ミカちゃんがおっさんってことは私はおばあちゃんってこと! それだけは許しませんよ。それだけは許しませんよ!」

帝「許してあげてよ。自分がおばあちゃんであることを許してあげてよ!」

そこに、臣下・アナグマが登場。

アナグマ「帝〜! 帝〜!」

帝「なにになに? どうしたの?」

アナグマ「(ワルツ歌ってる)」

帝「どーしたの!」

アナグマ「大変ですよ!」

帝「うん。だろーね! そんな感じの入り方をしてたもんね。えだって見た事ある?」

帝「うん。って入ってきて、唐突にボックステップするやつ見た事ある? ボックステップふみながら、ワルツを奏でるやつ見た事ある? 無いだろー! なあ! 観たこと無いだろー! リズムが違うもんね! リズムの不協和音? リズムの不協和音よ! なんだよリズムの不協和音って!」

帝の母「そんなにカッカしないの?」

帝「僕、今カッカしてた?」

帝の母「ええ、カッカしてたわ。このままだとミカちゃんがカッカ星人になるんじゃないかって心配しちゃったもの」

帝「なんだいママ、カッカ星人って。なんなんだいカッカカ星人って」

帝の母「カッカカ星人はこうよ。カッカカッカカッカカ」

帝「うわあー! 僕のママをどこにやった! 僕のママを返せ!」

帝の母「大丈夫よ。ミカちゃん。ママはここにーいるよ。ママはーずーっとママだよー!」

帝「こわかったよお。カッカカ星人怖かったよお」

アナグマ「帝」

帝の母「帝」待って、今いいところだから」

アナグマ「帝お」

帝「なによ」

アナグマ「それがですね」

帝の母「私たちの茶番を遮ってまで伝える価値のあることなんですよ、アナグマ」

アナグマ「それはもちろん、あのですね」

帝「さがってよいぞ」

アナグマ「はっ」

アナグマ、下がろうとしてすごい勢いで戻ってくる。

アナグマ「違ーうちがうちがう違ー!」

帝「どうした、お前は! 違井升代(ちがいますよ)さんか! ママ、妃ちゃんを呼んでちょうだい。ミカちゃんの妃ちゃんを呼んでちょうだい」

帝の母「なあにい。ママじゃだめなの?」

帝「ママじゃ妖艶すぎて、人間であるための最後のねじが外れちゃうぜ(ねじが外れる)」

帝の母「それは一大事ね! 妃〜! 妃〜!」

アナグマ「帝! それより聞いてください」

帝「この世をば、わが世とぞ思ふ、望月の、かけたることも、なしと思へば」

鹿威しの音。

妃、入ってくる。

妃「お呼びですか、ママ様」

帝の母「ミカちゃんがね、なんかお話したいみたいなの」

妃「なんでしよう帝様」

帝「お、妃ちゃん。いま暇?」

妃「ええ。ちょうど猫の糞で世界地図を作っているところでしたわ」

帝「尖った挑戦だね! 猫は世界中で愛されているもんね! どお? 完成した?」

帝「全然ちよーどじゃないね! 中米だもんね! 北米と南米をつないでる、この細いところだもんね!」

妃「きゃー。激しい突っ込み! ちよつと激しい突っ込みは夜だけにして」

帝「はい」

帝「あ、そういえば生者の国から人が来たらしいですよ?」

アナグマ「あ、それそれそれ! それ! それなの! それを言いたかったの!」

アナグマ「あ、あれです。えっとだから、つまり(なかなか言葉が出ない)」

妃「生者の国から人が来たんですって」

アナグマ「(それです)」

間

帝「それは本当か？」
アナグマ「あ、えっと、あれです、えっと、だから、つまり」
妃「本当らしいわよ」
アナグマ「(それです)」
帝「妃ちゃん、それ誰に聞いたの？」
妃「え？ アナグマさん」

やや問

帝「アナグマ！」
アナグマ「はいい！」
帝「そいつを、探し出せ！」

転換

3場 兄と妹の再会。しかし。

兄、森の中、タヌキを探している。

兄「おーい。おーい」

返事はない。

兄「くそ。どこに行きやがったんだ、あいつ。おーい。おーい。夢の国って割には薄気味わりい。こりゃあ、悪夢よりの正夢だな。おーい、タヌキ！ おーい」

歌が聞こえてくる。

♪
ねんねんころりよ おころりよ
ぼうやに毒もりゃ おころりよ
ぼうやのお守りは どこ行った
あの子こえて 里へ行った

兄「人がいるのか？ よくこの歌を歌ってもらいながら寝たなあ。そうそう坊やに毒もってね、おころりよなんてね。それじゃあね、永遠のおころりよだね。坊やのお守りがね、いない間をね、狙ったんだろうね。計画的犯行だね。うん。怖い歌になっちゃったね。勝手にアレンジしないでくれる？」

歌やむ。

兄「あ。でもどっかで聞いたことのあるアレンジだ」

動物の鳴き声とする。

兄、怖くなる。

兄「おーい。タヌキー。おーい」

妹、来る。
妹、先に兄を見つけ、衝撃を受ける。
兄、妹に気が付かず通りすぎそうになる。

妹「あの」
兄「あああああ！」
妹「いやあああ！」
兄「あああああ！ 人だあああ！」
妹「ひとですううう！」
兄「よかったあ！ さみしかったんだあ。見ず知らずの場所で、だあれもいなくて。心細かったんだあ」
妹「うん」
兄「ああ、ごめん。初対面の人に、こんな」
妹「え？」
兄「ごめん。びっくりさせて」
妹「え、あ」
兄「いま人を探してるんだ」
妹「あの」
兄「えっと、あの」
妹「あ、あ名前ね。俺はイカナゴ。君は？」
兄「ん？」
妹「ん？」
兄「覚えて、ない？」
妹「え、え、え、あ、前に会ってる？ うわ、ごめん。そういわれてみればそんな気がするかもしれない」
兄「あ、でも、違う人かも。あのだって俺、ここの人じゃないから。今日初めて来たのよ。別の人じゃないかな？」
妹「、、、そっか。そうかも(笑顔で)」
兄「うん。名前は？」
妹「アサリ」
兄「アサリね」
妹「うん」
兄「アサリはここら辺の人？」
妹「うん」
兄「あよかった。完全に迷子だったんだ」
妹「複雑だからね」
兄「そうなんだよ。右なのか左なのかわかんねえんだよ。というかその前にどこに向かえばいいかわかんねえんだよ」
妹「どこに行きたいの？」
兄「今さ、連れを探しててさ」
妹「背が高い人？」
兄「え、知ってる？」
妹「タ、ヌキさん？」
兄「そうそうそうそう！」
妹「友達？」

兄「友達、わかんない。仲間。」
妹「仲間？」
兄「おう。こう見えても天才のハカ泥棒なんだぜ」
妹「そうなんだ」
兄「一緒に来たんだけどはぐれちまったんだ。まだ、ここら辺にいる？」
妹「うん。湖のほとりの小屋に案内した」
兄「そこまで俺を連れて行ってくれないかな？」
妹「うん。いいよ」
兄「ありがとう」
妹「こっち」

兄、妹、はける。

4場 帝たちが生者を探すシーン。

帝とアナグマが歩いている。

帝「こっち？」
妃「こっちかしら？」
アナグマ「こっちです」
帝「あ、そっちな」
妃「あら」
帝「本当にこっちなのか？」
アナグマ「ええ、間違いありません」
帝「なんで、あんな湖に」
アナグマ「生者というのは大体は樹海を抜けてくるのです」
帝「それじゃあ、街のほうに来たっていいだろう。わざわざ湖なんかに行かなくても」
アナグマ「湖はサンズイに古いに月と書きます」
帝「ああ」
アナグマ「、、、」
帝「え、だから？」
アナグマ「、、、」
帝「え、だから？」
アナグマ「、、、」
帝「ええ、」

歩く

帝「うーん、こっち？」
帝の母「そうね」
アナグマ「いえ、こっちです」
帝「そっちか」
帝の母「惜しかったわね」
帝「惜しかった。もうちよいだった」
帝の母「次、次い」
帝「あの湖には言い伝えがあるんだっけ？」
妃「龍神様のお話ですか？」
帝「そうそう」

帝の母「あの湖に身投げをしたものを、龍神様が気に入ったら雨を降らし、気に入らなければ洪水を起こすのよ」
帝「強欲な神様だ」

歩く

帝「あーこっち」
帝の母「でしようね」
妃「私もそう思います」
アナグマ「こっちですよちよっと！道わかんないのに先頭歩かないでください！」
帝「いいじゃんかよ別に道わかんなくても先頭歩いたって！」
妃・帝の母「そーよそーよ」
アナグマ「いちいち訂正するのめんどくさいでしょ！」
帝「じゃあいいですう。あなたが先頭歩けばいいですう」
妃・帝の母「すうー」
アナグマ「そうさせて頂きますよ」
帝「気づいてる？あなたは今人民に平等に与えられた先頭を歩く権利を奪ったのよ。ねえ。気づいてる？」
帝の母「あら、ミカちゃん社会的い」
アナグマ「道を知っているものは知らない人より前を歩く義務があります」
帝の母「それも一理ある」
妃「うんうん」
帝「じゃあなに？人間は生まれながらにして平等ではないというんですか？」
帝の母「あれま」
アナグマ「平等だとおっしゃるのですか？」
妃「あら」
帝「そうよ！人間は平等なのよ！なんだよさつきから、使いつ走りのくせに偉そうに」
アナグマ「!!! 平等はどこへ行ってしまわれたのですか！（平等を投げる）」
帝「カツキン」
ホームラン実況のくだりカット
アナグマ「平等が。私たちの平等が！」
帝「人間、平等ではないってことさ」
アナグマ「、、、くそ」
帝「行くぞ、アナグマ」
アナグマ「はい」

歩く

帝「こっち」
帝の母「たぶんこっちな」
アナグマ「こっちです」
帝「あ、そっちか」
はける。

5場 兄とタヌキが再会するシーン

タヌキ、歌いながら砂遊びをしている。

♪ おっすばな おっすばな 楽しいな
おすなを集めて ペタペタペタ
おやまをつくるぞ ペタペタペタ
できたぞできた おやまができた
どーん！ どーん！ どーん！ どーん！

タヌキ「恐竜さんだぞー！ うおおお！」

タヌキ、恐竜になって山を破壊していく。

タヌキ「さみしいよお。だれかああ！」

妹に連れられて兄がやってくる。

兄「タヌキ！」
タヌキ「え、え、え、え、え、え」
兄「相変わらずうるせえなあおめえは」
タヌキ「イカナゴ！ いや、嘘だ。イカナゴがこんなところにいるわけがない。これは幻覚だ。惑わされるな、タヌキ。消えろ幻覚！ 消えろ！」
兄「やめろバカ！ 俺だよ、俺！」
タヌキ「うわあ。幻覚がオレオレ詐欺してくるよお。怖えよお。そうだ、お歌を歌おう」

♪ おっすばな おっすばな 楽しいな
おすなを集めて ペタペタペタ
おやまをつくるぞ ペタペタペタ
できたぞできた おやまができた
どーん！ どーん！ どーん！ どーん！

兄「うるせえな！ そっちの歌のほうが怖えよ！」

タヌキ「ああ、この感じ。本当にイカナゴなのか？」

兄「ああ、そうだよ。森の中で迷子になってたのを、アサリに助けてもらった」

タヌキ「なんだよここ。薄気味わりいよ。夢の国って言ってたけど、夢は夢でも悪夢よりの正夢だよ」

兄「まだ、わかんねえよ。これからなんか、王の軍勢とか来て、俺らを歓迎してくれるんだろ」

タヌキ「絶対してくれねえよ。俺ら墓泥棒だぜ？」

兄「墓泥棒だって立派なもんさ。誰にだってできるもんじゃねえってことよ」

タヌキ「誰にでもできるけどなあ」

妹「あの」

兄「ん？」

妹「イカナゴ、さん達はどうやってここに来たの？」

兄「お。いい質問だなアサリ。俺たちはな」

タヌキ「待ってくれよイカナゴ」

兄「なんだよ」

タヌキ「夢の国の住人にはそのことは伝えちゃいけない決まりだったらどうするんだよ」

兄「なんでだよ」

タヌキ「教えたなら呪われるんだよ」

兄「なんで教えたなら呪われるんだよ」

タヌキ「わかんねえよ。わかんねえから怖えんじゃねえか！ ヤンキーが人殴るのは怖くねえよ？ 人殴ってなんぼのヤンキーだもん。でもさ、普通の人が人殴ってたら怖えだろうがよ！ 世の中、不条理が一番怖えんだよ！」

兄「うるせえよお前！ 距離感がおかしいんだよ！」

タヌキ「なんでだよ。怖くねえのかよ。普通の人が殴ってるんだぜ？ 普通に人当たりのいい人が殴ってるんだぜ！」

兄「怖えよ！ 怖えけど今それ関係ねえだろ」

タヌキ「強がんなよ。強がんなくてもいいんだよ」

兄「え、なに？ 俺、今、強がってる？ 本当は俺、今、強がってる？」

タヌキ「強がってるよ」

兄「ごめん。俺、今、強がってたわ。心の震えを表に出さないように、何枚も何枚も衣をかぶって、隠してたわ。でもタヌキ。もう大丈夫。俺は今、心の衣を全部脱ぎ捨てたよ」

タヌキ「イカナゴお」

兄「怖いよお！ 人当たりいいのに、裏で人殴ってるやつが一番怖い！」

タヌキ「良いよイカナゴ。お前の心の衣がはだけていつてるよ」

兄「俺の心はもう裸だ。全裸だ。ネイクトハート。ネイクトソウル。ネイクトレボルユーシオン。さあ、アサリ。裸になったレボリユーシオンにどんな質問でもしてみるがいい」

妹「ここにどうやって来たの？」

兄「悪いがその質問には答えられない。夢の国の住人には伝えちゃいけない決まりなんだ」

妹「そんな決まり無いよ？」

兄「あ、そうなの？ そんな決まり無いの？」

間

兄「ネイクトレボリユーシオン！」

タヌキ「うおお！ なにすんだよ！」

兄「そんな約束ねえじゃねえか！」

タヌキ「あるなんて言ってたねえじゃんかよ」

兄「ああ、恥ずかしい。いわれるがままに服を脱いでしまった、恥ずかしい。これじゃあ私は裸の王様。お洋服屋さんと言われるがままに裸になっちゃったラマンチャの裸の王様よ」

妹「もしかして神様のお酒を飲んできたの？」

兄「そうそう。とある王様の墓で見つけたんだ。それでくいつとっぱ、と、ぱ、た、て、ば、な」

タヌキ「ばれてる。ばれてるよ」

兄「落ち着けタヌキ。いい意味でばれてるだけだ。いい意味でばれてるだけだ」

タヌキ「なんだよいい意味でばれてるって」

兄「いい意味だ。いい意味」
妹「神様のお酒を飲んできたの？」
兄「え、いや？ 別に？」
タヌキ「もう無理だよ、イカナゴ！」
カッツ

妹「いま直ぐ帰って」
兄「え？」
妹「帰って、いま直ぐ」
兄「なんでだよアサリ。今来たばかりじゃねえか。これから王様がパーティーを開いてくれるかもしれないねえだろ？」
タヌキ「なあ、イカナゴお。帰ったほうがいいんじゃないかね？」
兄「何言ってるんだよお前まで。まだ、来たばかりじゃねえか」
タヌキ「そりゃそうだけだよ」
妹「逃げないよ」
兄「逃げるって何から」

帝の一带、来る。

帝「こっちは？」
妃「こっちはじゃないですか？」
アナグマ「こっちはです！」
帝「またそっちはか！」
妹「あつ」

イカナゴ達と帝達、目が合う。

問

帝「何見てるんですかあ？ 見世物じゃないんですけどお」
兄「いえ、別にい？ あなたが私の視界に入ってきたんですけどお？ 邪魔なんでいてもらっていいですか？」
アナグマ「あ、あ、あ、こいつらです！ こいつらが生者の国から来た者どもです」
タヌキ「セイジヤノクニ？」
アナグマ「あ、やべ。あ、え、あ、あれです！ あの、ほら！ えっと」
妃「聖なる者の国から来た聖者様だとお見受けしましたわ」
アナグマ「お見受けしましたわ」
兄「聖者？ 俺たちが？」
タヌキ「おめえたちは何もんなんだ？」
アナグマ「我々はあれです。えっと。つまり」
帝「私様がこの国の王様だ」
アナグマ「です」
帝の母「あなたたち。神の酒を飲みましたか？」
☆兄「飲んでません」
☆タヌキ「飲みました」
兄「なんでお前言うんだよ」
タヌキ「えだつてもう絶対ばれてるよ」
帝「神の酒を飲んだのか！ 素晴らしい！（皆で拍手）
歓迎させてくれ」
パーティーをしよう。是非

兄「パーティー！ ほら！ やっぱり俺の言った通りじゃねえか！」
タヌキ「ほんとだ言った通りだ！」
兄「ええ、王様。喜んで」
アナグマ「それはよかった。ではこちらに」
タヌキ「お酒とかあるんですか？」
妃「たつくさんありますよ！」
タヌキ「そんなにあるんすか！」
妃「お酒はね、たつくさん！」
妹「行っちゃダメ！」
兄「なんだよアサリ。大丈夫だって」
帝「なんだそいつは」
兄「アサリは俺たちを助けてくれたんだ」
帝「あ、そうなの。じゃあ、一緒にパーティーする？」
兄「お。それがいいじゃねえか。な、アサリ一緒にいこう」
アサリ「ん、ん、」
兄「ん？」
アサリ「行かない」
タヌキ「イカナゴお。早く行こうぜ」
兄「おう。今行く。じゃあな、アサリ。助けてくれてありがとう」
妹「イカナゴさん」
一同、はける。

6場 過去回想のシーン1

妹と兄の出会い。

母「ほらほら、そんなところでポケっとして無いで、さっさと支度なさい。もう来ちゃうわよ」
妹「来ちゃうって誰が来ちゃうのよ」
母「さっきも言ったでしょう。家庭教師よ家庭教師」
妹「家庭教師なんて必要ないわよ」
母「必要ないことないでしょ。だつてほら聴いて。この音。（妹の頭を叩く）こゝん。煩悩がなくなっていくますよ」
妹「ちよつとバカにするのもいい加減にしてよ」
母「バカをバカにして何が悪いのよ」
妹「私だつてちよつとやそつと勉強したらバカじゃなくなるのよ」
母「だからその勉強をするための家庭教師なんじゃない」
妹「自分でもできます」
母「今までそういつてできなかったでしょ」
妹「嫌なもんは嫌なの」
母「嫌でもやらなきゃいけない事があるの」
妹「だからってなんで初めて会う人なの？」
母「あ、人見知りってやつ？」
妹「違います。どういう距離感でいったらいいかわからないんです」
母「それを人見知りって言うのよ」
妹「それにだつてお兄ちゃんなんでしょ」

母「腹違いのね」
妹「嫌よそんなの」
母「わがままはよしなさい」
妹「変態だったらどうするのよ」
母「大丈夫よ。ほおら、来ましたよ」

兄、来る。
兄、一句読む。

兄「中にゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越えて見るべく」

やや間

妹「いやよお母様。絶対変態よ」
母「私も心配になってきました」
妹「出会って早々和歌を読むやつは変態だって相場が決まっているのよ」
母「変態じゃなくて天才なかもしれないわよ」
妹「いくら天才だからって、出会って一言目で和歌は読まないでしょう」
母「読むのよ。そういう決まりなのよ。和歌界の決まりなのよ。千利休だって出会っ
たらまずお茶出すのよ」
妹「出会ってまず？一言もしゃべらずに？」
母「そうよ、一言もしゃべらずにシヤカシヤカやるのよ。シヤカシヤカやって」
妹「ゴクリ。ふう。おいしゅうございますなあ」
母「これが一言目よ！」
妹「そうだったのね！それじゃあこの人は和歌の天才なのかしら」
兄「申し遅れました。私今日からアサリさんの家庭教師をさせて頂きますイカナゴと
申します。どうぞよろしくお願いたします」
母「和歌がお上手なのね」
兄「ええ。和歌界きつての変態といわれております」
妹「やつぱり変態よ！お母様、和歌界のお墨付きの変態よ！」
母「それじゃ、娘をよろしくお願いたします」
妹「お母さん？」
兄「ええ。任せてください」
妹「お母さん」
母「(フアイト)」
母、はける。
間
兄「かわいいっすね」
妹、驚愕。
妹「そーいえば。先ほどの和歌の返事をしておりませんでしたわね」
妹、和歌を書き、兄に渡す。

兄「あ、どうも」
妹「それでは失礼して」
兄「あ、ちよつと」

妹、はける。

兄「まったく。照れ屋さんなんだから。(和歌を詠む)妹背山かげだに見えてやみぬ
べく吉野の河は濁れとぞ思う。うん。なんて言ってるかさっぱりだ」

7場 帝のパーティーのシーン。

帝「さあ、みんな宴じゃあ！」
アナグマ「ですが帝、食料などはどうするのですか」
帝「そんなの僕に聞いてどうするの？知ってるわけじゃないじゃん」
アナグマ「確かにその通りでした。己の過ちを恥ずばかりであります」
帝の母「そこら辺の人民から奪ってきましょう」
アナグマ「ママ様。ですが、今国は飢饉で食料など」
帝「何か家に隠しているだろう」
帝の母「それじゃあ、ぶんどってきますね！」
帝「私もお手伝いしますわ、ママ様！」
帝の母「やめて！あなたあれなの。私からミカちゃんを奪っただけでなく、仕事ま
で奪おうって言うの！」
妃「そんなつもりありません！」
帝の母「そんなつもりないんだつたら、そこで三点倒立でもしてなさい！」
妃「三点倒立ってなんですか。(母、はける)三点倒立ってなんですか！三点倒立
ってなんなんですかあ」
帝「大丈夫ですよ。妃ちゃん。代わりに三点倒立してあげるから」
妃「いいんですか。帝様」

帝、三点倒立する。

帝「なんか、ごめんね。プライベートな部分見せちゃって」
タヌキ「大変すね」
帝「まあ、遠慮せずに座ってよ」
兄・タヌキ・アナグマ「あ、じゃあ、失礼して」
帝「アナグマはダメよ！アナグマはダメよ！」
アナグマ「アナグマはダメなんですかあ！」
帝「アナグマはダメよ！だつてあなたやることがあるでしょう。やること！あ
ちよつと、頭が血が上ってきたから放してもらっていい？妃ちゃん？放しても
らっていい？妃ちゃん？」
妃「あ、わたしですか？」
帝「そうそうあなた。そうそうそう。あぶない。危なかった！顔の穴という
穴から血が噴き出すところだった！」
妃「タコさんみたいですね」
帝「タコさんみたいだね」
アナグマ「やることってなんですか？」
帝「あ、そうそう。あるでしょう！(めっちゃウインクしてる)やることあるでし
ょう！」

兄「そんなんですよ。眠り薬入れたほうがね、なんかキレが出るっていうか」

妃「私も飲んでみようかしら」

アナグマ「あ、じゃあ、私も」

タヌキ「どうぞどうぞ」

アナグマ「あ、どうもどうも。あー、そんなもんで、そんなもんで」

妃「あー、ありがとうございます。あ、ほんとどピリツとして美味しい」

アナグマ「ほんとだ。いいですね眠り薬」

兄「でしょ？」

タヌキ「ふあゝ！」

兄「うわあどうしたんだよ」

タヌキ「ごめんあくび出っちゃった」

兄「あくびまでうるせえな、おめえわあゝ」

タヌキ「なんだよ、イカナゴもあくび出てんじゃねえかよ、ふあゝ」

兄「ふあゝ」

タヌキ「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

帝「すごい。あくびではもってる」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

皆「ふあゝ」

8場 過去回想のシーン2

兄と妹。冬の月を見ている。

兄「あ、ほら、みろよアサリ」

妹「何を見るの？」

兄「月だよ月。きれいだろ」

妹「季節じゃないわよ」

兄「月に季節なんかねえよ」

妹「あるわよ。お団子食べるじゃない」

兄「あれはお団子が旬なんだよ。団子が旬の時に奇遇にも月を見てるんだよ」

妹「お団子に旬なんてないわよ」

兄「ほら、せっかくの満月なんだからもつと見ろよ」

妹「満月なんだからそんなに見なくても見えるわよ」

兄「何言ってるんだよ、アサリ。目って文字の中には月が入ってるだろ」

妹「だから、目って言うのは月を見るためにあるんだ」

妹「月を見るためにあるの？」

兄「そうだよ。人間って言うのは月を見るために生きてるんだ」

妹「どうして月を見るために生きてるの？」

兄「月にはな、夢の国が広がってるんだ。人間はみんな、昔は夢の国にいたんだ。俺たちには、その夢の国にいた時の記憶が流れている。俺たちは自分の中に流れるその夢の国の記憶をこの地上から見える月に重ねて思い出してるんだ」

妹「なにそれ？ 神話？」

兄「そう。神話。月が欠けていくにしたがってその記憶は薄く揺らいでいく。でも月がまた満ちてくれば、またその記憶を思い出す。今は薄く揺らいでしまっている夢の国の記憶も、また、思い出す時が、きっと来る」

妹「思い出したら、どうなるの？」

兄「思い出したら、わからん！」

妹「なによそれ」

兄「しようがねえだろわかんねえもんはわかんねえんだから。じゃああれだよ。思い出したらなんか嬉しいんだよ」

妹「なんでうれいしいのよ」

兄「知らねえよ。忘れてたもん思い出したら嬉しいだろうが」

妹「じゃあ、その記憶は幸せな記憶だったのね」

兄「ん、あ、そうなるの？」

妹「そうなんじゃない？ だって嫌な記憶だったら嫌じゃない」

兄「確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

兄「うん。そうだな、確かに」

妹「うん。そうだな、確かに」

母・妹、はける。

9場 現実世界のシーン。

兄、目が覚める。

タヌキ、入ってくる。
両者とも二日酔いである。

タヌキ「目覚めたか」

兄「王様たちは？」

タヌキ「いねえよ」

兄「なんで」

タヌキ「墓だ」

兄「墓？ 今日はお盆か？」

タヌキ「つまらねえ冗談はよしてくれ。頭に響く」

兄「俺の頭もニューロンが発狂してロックライブを開いてやがる」

タヌキ「できるもんなら、ドリルでコメカミに穴をあけて、富士山麓のきれいな水で洗い流したい」

兄「洗い流したい。おい。水持ってねえか？」

タヌキ「持ってたら苦労しねえよ」

兄「まじか、嘘だろ？ 富士山麓のじゃなくていいんだぞ？」

タヌキ「いまこの墓にある水分と一緒したらこれくらいなもんだぜ」

兄「(嗚咽) 馬鹿野郎。酒じゃねえか」

タヌキ「酒だよ。神の酒だ」

兄「神の酒？」

タヌキ「そうだよ。戻ってきちゃった」

兄「王の墓か」

タヌキ「あー妃ちゃんに会いてえ。妃ちゃんにひざ枕してもらいながら、ウコンの粉をシジミ汁で流し込んでもらいたい」

兄「むせるだろ」

タヌキ「それでもいい」

兄「なんだお前。好きなのか、妃ちゃんのこと」

タヌキ「自分を客観的に見て、合理的な判断を下す限り、そうみたいだな」

兄「めんどくせえなお前」

タヌキ「あのお酒を注いでもらった時よ。ビビってきちゃった。これは、一目惚れだね」

兄「ビビってただけだろ」

タヌキ「違うね。これは、恋だ」

兄「そりゃご立派なもんで」

タヌキ「会いにえなあ」

兄「飲みあいいじゃねえかよ」

タヌキ「気持ちがああ。つくれないよ」

兄「まるで大物俳優だな」

タヌキ「くそ。大物俳優みたいな人間にだけはならないようにしようと思って生きてきたのに」

兄「何よりも今は水だ」

タヌキ「だから、ここにはそれしかないって」

兄「最悪を通り越してゴートゥーヘルだよ」

タヌキ「それでもいい。地獄の苦しみより苦しい二日酔い。水があるなら地獄にでも行きたい」

兄「あるだろうな、夢の国には」

やや間

兄「飲むか？」

タヌキ「飲むか」

二人、酒を盃に注ぐ。

兄「よし。気持ちの準備は」

タヌキ「できてねえ。できてねえよ」

兄「匂いだけ。匂いだけ嗅いでみよう」

タヌキ「そうだな」

二人、匂いをかぐ。

兄・タヌキ、気持ち悪くなって、はける。

10場 帝たちの思惑がわかるシーン。

帝、その前にアナグマ。

帝「消えただと？」

アナグマ「そうです」

帝「そんな馬鹿なことがあるか。腐っても人間だぞ」

アナグマ「そうなのですが、私が振り下ろした剣が床に届くまでには生者は目の前から姿を消しておりました」

帝「どっかに逃げたのだろう」

アナグマ「寝たふりだったんです」

帝「じゃあ、どこへ行ったというんだ」

アナグマ「目の前で消えたんです」

帝「じゃあ、どこへ行ったというんだ」

アナグマ「生者の国へ戻ったんですよ」

帝「どういうことだいママ」

帝「眠るように死者の国にきたのだから、眠るように生者の国に帰ったとしても不思議じゃないわ」

帝「それじゃあ手の届かるところに逃がしたということか」

帝の母「そういうことになるわね」

帝「何をやってるんだアナグマ。神の酒を飲んでこの国を訪れるものなどそうそういないんだぞ」

アナグマ「申し訳ありません」

帝「またとない機会を逃してしまった」

妃「生き返れるなんてただの伝説じゃないのかしら」

アナグマ「わかりません。神の酒なんてただの伝説だと思っていましたが、神の酒を飲んでこっちの世界に来た奴らがいたのですから」

妃「だからって生者の生き血を飲んだら生き返れるってことにはならないでしょう」

アナグマ「そうです、神の酒を飲み、生きたままこの黄泉の国に足を踏み込んだも

のがいるのですから、伝説通り生き返る可能性がないとは言いきれませんが

帝「わかっているのか。お前は、それを取り逃がしたんだぞ」
アナグマ「深々と頭を下げることで済ませないでください（陳謝カッ）」

※すみませんで頭を下げる必要ありません

帝の母「まあミカちゃん。過ぎたことをあれこれ言ったってしょうがないでしょう」
帝「でもママ。またとないチャンスだったんだよ。生き返れるチャンスだったんだよ」
帝の母「大丈夫よ、ミカちゃん。何のために国民が飢餓で苦しむ中、納豆を奪ってま

でパーティしたと思ってるの」

帝「わかんないよ。そんなクイズ形式にされてもわかんないよ」

帝の母「じゃあ、ヒント。パーティといったら？」

帝・妃「楽しい」

帝の母「楽しかったら？」

帝・妃「またやりたい」

帝の母「と、いうことは？」

帝・妃「と、いうことは？」

帝「あああ。わかんないよ。全然わかんないよ」

帝の母「もうちよつとよ、ミカちゃん。もうちよつとよ」

妃「あ！ あ！ また、こちらに来るとのことですか？」

帝「そういうこと？ そういうことだったの？」

帝の母「そういうこと」

帝「さすが妃ちゃんだ。さすがはミカちゃんの妃ちゃんだ」

帝の母「だからあの人はまた、この国に来るわ。その時のために準備しましょう」

帝「そうだねママ！ それがいいね！」

妃「まずは何を準備しますの？」

帝の母「まずは、なんといいつても納豆よ。いつ客人が来てもいいように納豆を準備す

るのよ！」

帝「そうか、まずは納豆なんだね。よし、みんな。納豆を準備するぞ！」

1 1場 もう一度夢の国へ行くシーン。

現実世界。

兄・タヌキ、墓場。

二日酔いのためこれ以上お酒を飲みたくない。

兄「飲もう」

タヌキ「ちよつと待ってくれよ。心の準備が出来てないよお」

兄「思い切ったいこう」

タヌキ「いく？」

兄「行こう」

タヌキ「よし」

二人、盃を持つ。

兄「せえので、同時に飲もう」

タヌキ「ちよつと待って、せえのの後一拍あく？」

兄「なんだよこまけえなどつちだっただろ」

タヌキ「よくないよ。こういう細かいルールを決めとかなないと、後々面倒くさいんだ

よ」

兄「あーわかつたわかつた。じゃあ、一拍開けよう」

タヌキ「一拍開けるのね。開けるほうね」

兄「ああ。開けるほうだよ」

タヌキ「せえの、ゴクリね」

兄「そうだよ」

タヌキ「わかつた」

兄「おら。準備いいか？」

タヌキ「よし。おっけ」

兄「いくぞ」

タヌキ「あ、もう行く？」

兄「こういうのは勢いでいったほうがいいんだよ」

タヌキ「わかつたーあ、ごめん、ちよつとまって（嗚咽）」

兄「おい。やめろよ。映るだろうが（嗚咽）」

タヌキ「匂いが来たよ。匂いが来たよ」

兄「息止めよう。息止めてクイッていこう」

タヌキ「気持ち作られても身体が拒絶するよ」

兄「少しの我慢だ。妃ちゃんに会いたいんだろ？」

タヌキ「会いたい」

兄「じゃあ、少しくらい我慢しろ」

タヌキ「うん。わかつた。いこう」

兄「いくぞ」

タヌキ「うん。一拍な」

兄「ああ。せえの」

二人、飲む。

兄・タヌキ「（嗚咽）」

オープニング2。

天幕が開き、黄泉の国の住民が現れる。怪しげな表情。オープニング1よりも不気味な感じがする。

1 2場 帝達。宴の準備をする。

帝、納豆を温めている。

帝「ママ？ まだかな？」

帝の母「まだよ。そんな簡単に納豆にはならないわよ」

帝「でも、よくわからぬ豆。3か月温めてるよ？」

帝の母「3か月じゃどうにもならないのよ。こういうのは2・3年かけて作っていくもんなの」

帝「2・3年！ え、じゃあまだ、1割も終わってないの？ 結構すでに飽きちゃっ

てるけど1割も終わってないの？」

帝の母「そうよ。1年を超えてからが山場なんです。だんだん臭いもきつくなっ

てくるし」

帝「いやだよ。匂いきついのはいやだよお」

帝の母「甘えないの！ いつまでもママに甘えられると思ったら大間違いよ！」

帝「急な親離れだよ。親離れのスピードについていけないよ」

アナグマ、入ってくる。

アナグマ「帝！ 来ました！ 来ましたよ！」

帝「私別にあなたのこと呼んでないんで。下がってもらえる？」

アナグマ「あ、はい。失礼しました」

アナグマ、下がろうとする。

帝「何よ来ましたって小学生かよ」

帝の母「アナグマ？」

アナグマ「はい？」

帝の母「飢饉のほうはどうなってますか？」

アナグマ「それが、より深刻になっているようで。雨さえ降ればまだどうにかなんと
思うのですが」

帝の母「どうして雨が降らないの？」

アナグマ「もう3か月も降っておりません」

帝「3か月。ちょうど僕が豆を温めだしてからだな」

やや間

帝の母「ミカちゃん？」

帝「え、なにママ？」

帝の母「ミカちゃん？」

帝「何々？ 近いよママ。近いよママ。親離れのリバウンドがすごいよ」

帝の母「ミカちゃん？ あのね？ それ、もう温めるのいいかも？」

アナグマ「そうですね。もう十分でしょうね」

帝「何言ってるんだよママ。さつき2・3年温めなきゃ言ってたじゃんかよ。1年
を超えたところからが山場だって言ってたじゃんかよ。ミカちゃんね、思ったんだ。
いつまでもママに甘えてばかりじゃいけないって。だからね、この大豆かどうか
よくわからない豆、温めるんだ。どんなに邪魔されたって温めるんだ。見ててね、
ママ」

帝の母「もういいのよミカちゃん。ママが間違ってた。納豆って人肌で温めるもんじ
ゃなかった」

帝「何言ってるんだよママ。もうちょっとで孵化しそうなんだぜ？ ちょっと生命の脈
動を感じるようになってきたんだ。もうちょっとで大豆から小納豆たちが孵化して
きそうなんだ」

アナグマ「でも帝。その大豆を温めるのをやめなければ雨が降らないのです」

帝「どういう原理？ ねえ、それ、どういう原理？」

アナグマ「え、それは」

帝の母「上昇気流よ。上昇気流に使われるための熱が、全部その大豆を温めるために
使われているのよ。だから、雲が出来ないのよ」

帝の母「どうしてよ」

帝「えだつて、3か月こうやってきたんだよ？ 3か月。わかる？ 3か月よ3か月。
寝る時も遊ぶ時も、ずっとこうしてきたのよ？ しんどかったんだから。でも、マ
マが客人がいつ来てもいいように納豆をつくらなきゃって言うから、こうして頑張
ってきたのよ？ それをさ今になってさ、もうやめようなんてさ、ひどいよ！ 言
うなら3時間くらいで言つてよ！」

帝の母「ごめんね。ごめんね。ママが悪かった。ママが悪かったから」

帝「どんなに謝ったって、僕は大豆を温め続けるからね。この大豆が孵化して、立派
な大人の納豆になるまで温め続けるんだからね」

帝の母「ごめんね。ごめんね。ママの言うことを聞いて？」

帝「やだよやだよやだよやだよやだよやだよ」

帝の母「ミカちゃん」

アナグマ「それは、飢饉は。国民はどうすればいいのですか！」

帝「そんなのわからないよ！ なんか生贄とかだよ生贄とか。そんなんだよ」

アナグマ「何を言ってるんですかあなたは。そんなことできるわけじゃないでしょう」

帝の母「いや、生贄よ、アナグマ」

アナグマ「ママ様？」

帝の母「ミカちゃんが大豆を温めるのをあきらめてくれな以上、雨を降らせるには
生贄を捧げるしかないわ。湖の竜神様に、生贄を捧げましょう」

アナグマ「何を言ってるんですかママ様。帝が大豆を温めるのをやめれば、生贄など
捧げなくてもいいんですよ」

帝の母「どっちが簡単なの。どっちが簡単なの！」

アナグマ「それは」

帝の母「そういうことなんですよ」

アナグマ「苦渋の決断というやつですね」

帝の母「ええ。心苦しいけど」

アナグマ「致し方ないですね。それで誰を」

帝の母「ほら、なんか湖に女の子いたでしょう」

アナグマ「ええ。生者を助けたとかいう」

帝の母「その子にしましょう」

妃、入ってくる。ウキウキ。

妃「何の話をなさってますの？ 生贄とかなんだとか」

アナグマ「妃様。この飢饉を鎮めるために、湖のほとりにいた女の子を生贄に捧げよ
うということだ」

帝の母「湖の龍神様にドポーンでしょうね」

アナグマ「あら、大変」

妃「苦渋の決断ですね。あ、そうそう帝様」

帝「どうしたの妃ちゃん。おならで宇宙まで行くのに成功したの？」

妃「まだまだですわ。まだ、3メートルくらいしか飛ばませんわ」

帝「結構飛んだね！ もうちょいだね！」

帝「これから精進あるのみです。それより今度はどんなパーティをなさるの？」

帝「パーティ？ この飢饉でそんなのやってる場合じゃないよ」

妃「じゃあ客人はどうやってもてなすんですか？」

帝「それはパーティだよ。客人が来たらパーティをしなきゃならないよ」

妃「ほら、パーティーするんじゃないですか」
帝「客人が来たからね？ 客人が来たらパーティーしよう」
妃「来ましたよ？ ね？ アナグマさん？」
アナグマ「え、あ、はい」

やや間

帝「なんで言わないの！」
アナグマ「来たって言ったじゃないですか！」
帝「言わないよ！」
帝の母「準備しなきゃ。準備しなきゃ」
帝「いま奴らはどこにいるんだ」
アナグマ「おそらく湖のほうに」
帝「探しに行くぞ！」

帝、帝の母、アナグマ、はける。

妃「え、あ、ちよつと」

タヌキ、顔を出す。

タヌキ「え、もう入っていいですか？」

妃「あ、どうぞ」
タヌキ「お邪魔しまーす。あれ。誰もいないんすね」
妃「ごめんなさい。来たのを教えようと思ったら、みんな湖のほうに探しに行っちゃいました。あ、お茶でも飲みますか？」
タヌキ「あ、そうっすね」

鹿威しの音。

転換

13場 イカナゴとアサリのシーン。

湖のほとりの山小屋である。

兄「だから、なんで帰らなきゃならねえんだよ」
妹「なんでって、殺されるのよ」
兄「なんで何もしねええのに殺されるんだよ」
妹「生者の国から来た者の血を飲んだらいいことがあるのよ」
兄「神話だろ」
妹「神話よ」
兄「神話なんじゃねえか」
妹「神話だけど」
兄「そんなん信じる馬鹿いねえよ」
妹「いるわよ。だって神の酒を飲んできた人がいたんだから」
兄「でも親切な人たちだったぜ？」
妹「親切には裏があるのよ」

兄「なんでそんなまどろっこしいことするんだよ。ばっばとやればいいだろ」
妹「わかんないわよ！ ワビとかサビとかあるんじゃないの？」
兄「人殺すのにか？」
妹「知らないわよ。私に聞かないでよ」
兄「そんなこと言って本当はお前が俺を狙ってるんじゃないのか？」
妹「バカじゃないの？」
兄「馬鹿じゃなくてハカ泥棒」
妹「バカ泥棒でしょ」
兄「変態のバカ泥棒と天才のハカ泥棒は紙一重なんだよ」
妹「なんで私があなたを殺そうと思ってるのよ」
兄「なんせお前は最初に会った時から親切だった」
妹「親切でいいじゃない」
兄「親切には裏があるんだろ？」
妹「それは――」
兄「いいように見せて、油断させて俺を殺そうっていう作戦だ。そうだろ？」
妹「そんなわけないじゃない」
兄「じゃあ、なんでそんなに俺に親切なんだよ」
妹「それは、」
兄「それは？」
妹「あなたが、私の、」

そこに帝達が来る。

帝「あー。いたいた。久しぶり久しぶり。ナイストゥーミーチュー」
兄「あー。王様」
帝「そうよ。王様よ。パーティーする？ パーティしちゃう？」
帝の母「しょうね。客人はおもてなししなきゃね」
兄「しましよう。パーティーしましよう。パーティーするために夢の国に来たといっても過言ではありません」
帝「そうよね。世の中パーティーだもんね」
妹「イカナゴさん」
兄「大丈夫だつて、アサリ。なんかあったって俺は天才のハカ泥棒だぜ」
妹「変態のバカ泥棒でしょ」
兄「だから、変態のバカ泥棒と天才のハカ泥棒は紙一重なんだよ」
妹「なんでわかってくれないの？」
兄「わかるって何をだよ」
妹「もういい」
兄「何怒ってんだよ」
帝「え、いい？」
兄「ん？」
帝「パーティー行っちゃっていい？」
兄「ああ！ 行きますよう行きますよう！ すぐにでも行きますよう」
アナグマ「あ、帝。では、私は（生贄のほうやっておきますんで）のジェスチャー」
帝「あ、あ、そうね。ちようどいいね。じゃ、任せたよ」
帝の母「しつかりね、アナグマ」
アナグマ「はい。お任せください」
帝「よし、じゃあ行こう！」
兄「よいしょ！」

帝「あれ？ もう一人いなかったっけ？」
兄「いや、どこ行ったかわかんないんすよねえ」
帝「あ、そうなんだ」

帝、母、兄、はける。
残されるアナグマと妹。

アナグマ「きれいな湖だね」

アサリ、びっくりする。

アナグマ「この湖には龍神様が住んでるんだらう？」

アサリ「(うなずく)」

アナグマ「この湖に身投げをして龍神様が気に入ったら雨が降り、気に入らなければ洪水が起きるんだらう？」

アサリ「(うなずく)」

アナグマ「3か月くらい雨が降ってなくってさ。この国は飢饉なんだよ」

アサリ、たじろぐ。

アナグマ「ごめんよ」

妹に襲い掛かるアナグマ。

妹「いや」

妹、逃げる。はける。

アナグマ「いったいなあ。ちょっと逃げないでくれよ」

アナグマ、追ってはける。

14場 妃とタヌキのシーン

タヌキ、お茶を飲んでいる。
鹿威しの音が鳴っている。風流。

タヌキ「茶がうめえ」

妃「そんなにですか？」

タヌキ「ええ。この世で二番目にうまいっす」

妃「一番は？」

タヌキ「シジミ汁っす」

妃「好きなんですわね。シジミ汁」

タヌキ「今はねえ」

妃「お酒もあるのに」

タヌキ「お酒は！ 結構！」

妃「そうですか」

お茶を飲む。

タヌキ「ああ。うめえ」

妃「もう一人の方はどうされたんですか？」

タヌキ「イカナゴっすか？ さあ、わかんないっす。こっちに来るときはバラバラになっちゃうんすよ」

妃「そうなんですわね」

タヌキ「そうなんすよお」

妃「すみませんね、お茶しなくて」

タヌキ「いえいえ全然。二番目にうまいんで」

妃「おつまみでもあればいいんですけど飢饉でしょ」

タヌキ「あ、そうなんですわ」

妃「それで、納豆しなくて」

タヌキ「ああ、それで、納豆しかなかったんすね」

妃「ええ。このままだと大変だからって生贄を捧げることにしたんです」

タヌキ「あー、生贄ねえ。やりますよねえ」

妃「ええ。なんか、湖のほとりに女の子いたじゃないですか？ その子にしようってなってる。どうですかね？」

タヌキ「あー。アサリちゃんね。かわいいっすもんねー」

妃「かわいいですよねえ。小柄で」

タヌキ「ええ。あ、ここだけの話なんですけど。あ、誰にも言わないでくださいね」

妃「なんですわ？」

タヌキ「あのね。え、ほんとに誰にも言わないっすか？」

妃「言わない言わない」

タヌキ「あの、イカナゴが。あ、イカナゴって、ほら、もう一人の」

妃「あーはいはい」

タヌキ「イカナゴがね、アサリちゃんの事好きなんじゃないかって」

妃「えー」

タヌキ「きゃー」

盛り上がる。

妃「青春ですわねえ」

タヌキ「青春ですよお」

やや間
鹿威しの音。

タヌキ「え、生贄にされるんですか？」

妃「ええ。湖の龍神様に」

タヌキ「え、生贄にされるんですか？」

妃「ええ。湖にドボンって」

タヌキ「え、え、え、マジっすか？」

妃「まじですよ？」

タヌキ「お茶、ごちそうさまでした」

妃「どこか行かれるんですか？」

タヌキ「え、ほら、イカナゴにこのこと伝えなきゃって」

妃「それならここで待ってたら来ますわよ」

タヌキ「あ、それもそうか」
妃「ええ」

タヌキ、すわる。お茶をすすする。

タヌキ「えーつとあの」
妃「はい」
タヌキ「あのー。好きです」

鹿威しの音

15場 アサリ追われ出すシーン

アサリ出てきて、物陰に隠れる。息を殺す。
アナグマ出てくる。

アナグマ「あれえ？ どこいったんだー？ ここかな？ あれ、いない。ここかな？
どこいったのかなー。鬼さんこちら手のなるほうへ。あ、見つけた」

アサリ、捕まりそうになるが逃げる。

アナグマ「ちよつとお。あーもお。面倒臭いなあ」

アナグマ、追う。

16場 宴のシーン

宴が始まる。

兄「タヌキ」

タヌキ「イカナゴ。どこ行ってたんだよ」

兄「湖のほうだよ」

帝「君はもうついていたのね」

タヌキ「あ、お邪魔してます」

帝「じゃあ、ママ準備よろしくね！ あれしといてね（毒入れておいてね的な）」

帝の母「あれね、あれ（ジェスチャー）」

帝「うん。あれ。よろしく」

帝の母「はい」

帝の母、はける。

タヌキ「あれ、なんか帝、太りました？」

帝「え、いや？ そんなことないけど。どうだろ」

妃「そんなことないですよ」

帝「だつて」

タヌキ「え、でも前より」

兄「確かに」
帝「あ、これ？ これね？ これ、納豆。今ね大豆を温めて納豆作ってんの」

タヌキ「あ、それ、納豆」

兄「納豆作ってるんすか」

帝「そうそう。君たちがいつ来ても出せるようになって作り出したんだけどまだできて

なくつて。ごめんね」

兄「いえいえ全然」

妃「あ、お茶どうぞ」

兄「ああ！ ありがとうございます」

タヌキ「うめえぞお」

兄「ああ。染み渡る。この世で二番目に染み渡る」

帝「一番はなんなの？」

兄「一番はシジミ汁っす」

タヌキ「一番はシジミ汁だなあ」

帝「シジミ汁ねえ」

帝の母、入ってくる。

帝の母「はい。お待たせしました」

兄「ああ、ありがとうございますわざわざ」

タヌキ「俺らなんかのためになあ（この後、兄とタヌキは「ありがてえなあ」とか言

ってる）」

帝「そんなそんな。（母に）これ？（これに毒はいつてる？）」

帝の母「（そつちじゃない。こつちこつち）」

帝「（こつち）」

帝の母「（うんうん）」

帝「あ、じゃあこれどうぞどうぞ」

妃「私がおつぎいたしますわ」

兄「あ、なんですか、それ？」

帝の母「とつておきのお酒です」

兄・タヌキ「お酒は！ 結構！」

帝・帝の母・妃「、え？」

兄「我々、お茶さえただければそれで充分ですの」

帝の母「でもせっかくだからねえ」

妃「ちよつとだけでも」

タヌキ「いえいえいえいえいえ。うっ（嗚咽しそうになる）」

兄「ばか。やめろうつるだろっ（嗚咽しそうになる）」

妃「体調が悪いですか？」

兄「あーいや。そういうわけではないんですけど」

帝「お酒いらない？」

タヌキ「（嗚咽）」

兄「おい（嗚咽）」

タヌキ「ごめん。例のあの単語だけで吐き気が」

帝の母「いらなみたいたいね。お酒」

タヌキ・兄「（嗚咽）」

妃「大丈夫ですか？」

タヌキ・兄「ええ。全然大丈夫」

妃「そうですか」

兄「お茶でいいんでパーティーしましょう」
帝「えーあーそう」

やや間

帝「あ、ちよつとあの。はい！」
兄「どうしたんすか、王様？」
帝「えつとあのートイレ」
帝の母「ママも一緒に行きます」
タヌキ「え、なぜ？」
帝「妃ちゃんもいくよね？」
タヌキ「なぜ？」
妃「私もですか？」
帝「(ウインク) 行くよ」
妃「はい」

帝・帝の母・妃、はける。
兄・タヌキ、残される。

兄「変わった人たちだな」
タヌキ「だな」
兄「ついでいてやるか、お酒」

ものすごく嗚咽する。

タヌキ「さつき妃ちゃんと二人っきりでお茶してさあ」
兄「おう。よかったじゃねえか」
タヌキ「なんか、向こうもまんざらでもない感じだよ」
兄「人妻なの？」
タヌキ「人妻なの？」
兄「そんで？」
タヌキ「そんで、アサリちゃんが生贄にされるらしいよ」
兄「あ、そうなの？ なんで？」
タヌキ「雨乞いの生贄っぽいよ。飢饉の」
兄「ああ、飢饉のね。ん？ アサリが？ 生贄に？」
タヌキ「うん」
兄「バカ。なんでそれを先に言わねえんだ」
タヌキ「先って何の先？ 何と比べた時の先？ おい、どこ行くんだよ」
兄「アサリんここに決まってんだろ」
タヌキ「一言言つてかなくて大丈夫かな」
兄「じゃあ、お前が残ってる。バカ」

兄、はける。

タヌキ「あちよつと。(置き手紙を書く)。ちよつと待ってよお！」

タヌキ、はける。

18場 追われるアサリのシーン

アサリ、走ってくる。疲れている。道が二つに分かれている。どちらかに進む。
アナグマ、追ってくる。
アナグマ「鬼さんこちら。手のなるほうへ。あれ、くそ。どっちに行つたのかな？ こ
っちかな？」

アナグマ、はける。

兄・タヌキ、走りこんでくる。

兄「分かれ道だ」
タヌキ「どこに向かつてんだよ」
兄「湖だよ湖」
タヌキ「そこにいんのかな」
兄「それ以外よくわかんねえんだからしようがないだろうがよ」
タヌキ「それでどつちの道なんだ？」
兄「お前覚えてねえか？」
タヌキ「え、え、こつち」
兄「よし、じゃあこつちだな(逆に進む)」
タヌキ「え、なんで聞いたんだよ、なんで聞いたんだよ」

兄・タヌキ、はける。

帝・帝の母・妃、入ってくる。

帝「お、ま、た、せ、し、ま、し、たー。いやー大きな糞だったからね」
妃「そうですわね。宇宙規模の糞でしたわね」

やや間

3人「ん？」
帝の母「透明になっちゃったのかしら」
帝「その可能性は低くない？」
妃「置き手紙がありますわ？」
帝「あ、そうなの妃ちゃん？ なんて書いてあるの？」

妃、読む。

すぐく急ぎでイカナゴが飛び出していったので
きもちとしては、こちらに残りたいのですが
でかけてきます。
すぐに戻ってきます。

帝「急ぎのことって何だろう」
妃「生贄のことじゃないかしら」

帝「なんで客人が知ってるの？」
妃「私がタヌキさんに言いましたの」
帝「あ、そうなんだ。そういうことあんまり外の人に言っちゃだめよ」
妃「はい」

帝の母「それじゃあ湖のほうですかね」

帝「そうだねママ。湖のほうだね」

帝の母「さあ、行くわよミカちゃん。ママのスピードについてくるのよ」

帝「ママ早いのか？」

帝の母「はいわよ。空気抵抗少ないからね」

帝「あ、待ってよおママ！」

帝、はける。

妃、手紙をかたづけようとして、追伸に気が付く。

妃「追伸 頭文字を読んでね！ 頭文字？ すーきーです？ もうタヌキさんったらっ」

妃、追っかけていく。
兄・タヌキ出てくる。

兄「さつきと同じとこじゃねえのか？」

タヌキ「同じかどうかさえ分からないくらい一緒だよ！」

兄「くそ」

タヌキ「暗くなっあきたよお。こええよお」

兄「うわあ！」

タヌキ「うわあ！ なんだよ。びっくりさせんなよ！」

兄「動物の鳴き声が聞こえた気がしたんだよ」

タヌキ「そんなこと言うなよ、聞こえてくる気が——それだ！」

兄「あん？」

タヌキ「それだよ！」

兄「何がそれなんだよ」

タヌキ「大きな声出して、その反射を聞くだろ。そしたらこの森の構造が全部わかる」

兄「うお！ まじかよ。そんなことでいいのかよ」

タヌキ「できねえよ！ できねえけど一回やってみよう！」

兄「おう」

タヌキ「耳ふさいでろよ！ 鼓膜がゴートゥーヘルだぜ」

兄、耳をふさぐ。

タヌキ、大きな声を出す。反射を感じる。

兄「どうだ。聞こえたか？」

タヌキ「たぶん。こっちだよ！」

兄「じゃあこっちな（逆のほう）」

タヌキ「なんで聞いたんだよ。なんで聞いたんだよ」

兄・タヌキ、はける。
妹、入ってくる。疲弊しきっている。隠れる。

アナグマ「あー、くそ。見失った。どこいきやがったー」

妹、出てきて、小屋の中に入る。

帝・帝の母・妃、出てくる。

帝「暗くなってきたよママ」

帝の母「急ぎましょう」

妃「どっちの道でしょう」

帝の母「こういうのってね、必ずたどり着ける方法があるの」

帝「そんなのがあるのかい？」

帝の母「ずっと、右手で壁を触りながら進むといつかゴールにたどり着くのよ」

帝「そうなの！」

帝の母「いくわよ！」

妃「迷路の話じゃないですか？ それって迷路の話じゃないですか？」

帝・帝の母・妃、はける。
兄・タヌキ、入ってくる。

兄「あつた、小屋だ！」

タヌキ「天才だなおめえは」

兄「おい！ アサリ！ いるか？」

妹（声）「イカナゴさん？」

タヌキ「よかった捕まってなかった」

兄「ああ、迎えに来たぜ」

妹（声）「入らないで！」

兄「なんだよアサリ。まだ、喧嘩のこと気にしてるのか？ それなら俺が悪かった。

妹（声）「入らないで！」

兄「何言ってるんだよ。早えとこ逃げねえと、お前生贄にされるぞ。おい、入るぞ」

妹（声）「あ、ちょっと」

兄・タヌキ、小屋に入る。

兄・タヌキ（声）「うわあああ！」

兄・タヌキ、小屋から逃げ出してくる。

タヌキ「わ、わ、わ、わ、わ」

兄「ば、化け物。化け物だ！」

兄・タヌキ、這ってはける。

妹、出てくる。妹の身体中にはウジが湧いている。

妹「入らないでって言ったのに」

妹、湖の水でウジを落とす。
アナグマ、出てくる。ウジが湧き出している。

アナグマ「あー。森から出てしまった。くそ。どこ行きやがったんだ。ん？（耳をすませる）」

帝・帝の母・妃の声が聞こえてくる。
帝・帝の母・妃もウジが湧いている。

帝「ママ？ 森出ちゃうよ、ママ？」
帝の母「右手よミカちゃん。右手よ」
妃「迷子ですよ」

帝「暗いよお。怖いよお」
アナグマ「帝」

帝・帝の母・妃「うわああ！」
☆帝「ごめんなさいごめんなさい！ 何もしてないんですけどごめんなさい！」
☆妃「私の命もここまで。今まで、たくさんのお愛をありがとうございました」

アナグマ「私です。アナグマです。アナグマ」
帝「あ、あ、あ、アナグマ」
妃「アナグマさん」

アナグマ「どうしたのですか？」
帝「客人が湖のほうに逃げ出した」

アナグマ「客人が？ なぜ？」
帝「妃ちゃんが、生贄のことを言っちゃったみたいなんだ」
妃「ごめんなさいです」

帝「生贄はどうした」
アナグマ「それが、まだ捕まっておられません」

アナグマ「すみません」
帝の母「とりあえず湖のほうね。湖のほうに行きましょう」
アナグマ「湖のほうでしたらこちらです」

全員、はける。
兄・タヌキ、出てくる。

タヌキ「待ってくれよイカナゴ。待ってくれよイカナゴ」
兄「逃げるぞ。逃げるぞタヌキ」

兄「わかんねえよ！ どっか遠くにだよ！ だっけ見ただろ！」
タヌキ「見た。ウジが湧いてた。身体中ウジだらけだった！」

兄「ここは夢の国なんかじゃなかったんだ。黄泉の国だったんだ」
タヌキ「死者の国だよ！ あいつらはみんな死人なんだ！」
タヌキ「ええ！ こええよ！ こええよ！」

兄「だから、逃げるんだよ！ 早くしろ！」
タヌキ「うわあああ！ まっけてくれよお！」

湖のほとり。ウジを湖の水で落としてる。

妹「いなくなつて。いなくなつてよ」
帝・帝の母・妃・アナグマ、出てくる。

アナグマ「湖だったらこっちです」
帝「暗くてよく見えん」

妃「あ、いましたわ」
帝「え、どこ？」

帝「ほら、あっち」
帝・帝の母・アナグマ「え、どこ？」
妃「ほら、湖のほとり」

帝「見えん」
帝の母「近づいてみましょう」
一同、近づいてくる。

帝・帝の母・アナグマ「あ、いた！」
妃「ね？ 言ったでしょ？」

帝・帝の母・妃・アナグマ、妹を取り囲む。
アナグマ「ようやく追いつきましたよ」
帝の母「ちよつとね、申し訳ないけど、飢饉だから」

妹を捕まえる。
妹「やだ、やめて！ 離して！」
帝「儀式があるからね。小屋に閉じ込めておこう」
妹「やめて！」

妹、小屋に閉じ込められる。

妹「だして！ こっから出して！」
アナグマ「もう儀式をしますか？」
帝「いや、今は客人だ。客人を探そう」
帝の母「そうね。探しましよう」
アナグマ「四手に分かれましよう」
帝「またこの湖に合流ということだな」
アナグマ「できれば」
帝「まかせとけ」

帝・帝の母・妃・アナグマ、はける。

19場 現実世界のシーン

兄・タヌキ、妹が監禁されたところから飛び出してくる。

兄「ここまでくればもう大丈夫か？」
タヌキ「うん。追ってきてない。誰も追ってきてないよ」
兄「水、水」
タヌキ「あれ？ 誰も追ってきてないというか、壁だよ」
兄「あつた、水だ。あーくそ、あとちよつとしかねえ」
タヌキ「あれ？ あ、あ、あ！ ああああ！（水を奪う）」
兄「何すんだよ」
タヌキ「これはダメだ、イカナゴ。これはダメだ」
兄「返せよ！ 喉がサバシバなんだよ！」
タヌキ「水じゃない！ 水じゃないよこれは！」
兄「何言ってるんだ！ どっからどう見たって水だろうが！ 上善如水だろうが！」
タヌキ「気づいてるよ！ 本能ではこれが水じゃないことに気づいてるよ！」
兄「返せよ！」
タヌキ「これは神の酒だよ！」
兄「何言ってるんだ。こんなところに神の酒がある訳ねえだろ」
タヌキ「あるよ！ あるんだ。よく見ろイカナゴ。ここは黄泉の国なんかじゃねえ。墓だ。俺らが元いた墓だ」
兄「何をバカなこと言ってるやがるんだ。分かった。そうやって水を独り占めするつもりだろう」
タヌキ「何言ってるんだよ！ ちゃんと周りをみろよ！」
兄「ちゃんと見たさ。確固たる証拠としてここには王の棺がある」
タヌキ「だろ？」
兄「ああ、だから、ここは王様の墓だ」
タヌキ「、だろ？」
兄「、え、じゃあそれは？」
タヌキ「神の酒だよ」
兄「（嗚咽）」
タヌキ「大丈夫？」
兄「え、何？ お前もう平気なの？」
タヌキ「うん。イカナゴが宮殿に来るまでにお茶20杯くらいもらったから」
兄「あ、そうなんだ（嗚咽）」
タヌキ「なんか、ごめん」
兄「何にせよ帰ってこれたってわけだ」
タヌキ「うん」
兄「なんだよ、そんな浮かねえ顔して。さっさとずらかるぞ」
タヌキ「うん」
兄「なんだよ」
タヌキ「やつぱり戻ったほうがいいんじゃないかな」
兄「どこに？」
タヌキ「夢の国」
兄「なんだよ？ お前も見ただろ、あのウジにまみれた身体」
タヌキ「見たよ。見たけどさあ」
兄「あそこは夢の国なんかじゃなかった。黄泉の国だ。死者の国なんだ」

タヌキ「でも、あのままじゃアサリちゃん、生贄だぜ？」
兄「そんなんしょうがねえだろうがよ」
タヌキ「そうかもしれねえけどよ」
兄「なんだよ」
タヌキ「なんか嫌だよ」
兄「なんか嫌とかじゃねえんだよ。なににせよ俺はもう行かねえからな」
タヌキ「イカナゴお」

20場 対立する帝とアナグマのシーン

アナグマと帝が森の中で出会う。

帝「客人は？ 生者はどこにいった？」
アナグマ「いえ、こちらには」
帝「もう何やってるの。また生者を逃したじゃないか！」
アナグマ「私が悪いというんですか？」
帝「シヨウユウことだ！ お前がなんか凄いやつて捕まえないのが悪いんだ！」
アナグマ「なんですか、なんか凄いやつて！」
帝「なんか森をモヤシたりだよ！」
アナグマ「そんなことできるわけないでしょう。」
帝「うるさい！ いちいち揚げ出しをとるな！」
アナグマ「豆腐ですよ！ 揚げ出しは豆腐ですよ！」
帝「そう言うのを揚げ出しをとるって言うんだ」
アナグマ「ダメだ。帝が大豆に乗っ取られたしてる！」
帝「こうなったら軍をトウニユウするしかないか」
アナグマ「トウニユウ！ 大豆だ！」
帝「何を言っているんだ」
アナグマ「まてよ。帝さっきなんておっしゃいました？」
帝「さっきって、軍をトウニユウするしかないって」
アナグマ「もつと前です」
帝「森をモヤシたりとか」
アナグマ「モヤシ！ 大豆だ！」
帝「何をやってるんださっきから！ シヨウユウことをやっている場合じゃないだろ！」
アナグマ「気のせいじゃない。さっきからシヨウユウことに聞こえるのは気のせいじゃない。大豆だ！」
帝「どうしたアナグマ。脳ミソでもやられてしまったのか」
アナグマ「確信犯だ！ これはもう確信犯だ！ 帝。私はあなたを現行犯で逮捕します」
帝「わ、何をするんだ！ やめろ！ はなせ！」
アナグマ「そのお腹の器を外してください、帝。浸食されています！ あなたは今大豆に浸食されています！」
帝「そうユーバかな事を言っているから生者を逃すんだ、お前は！」
アナグマ「そうユーバかな？ 湯葉だ！ ちよつと無理のある湯葉だ！」
帝「3か月頑張ってきたんだぞ！ 3か月。こうやって肌身離さずダイズにダイズに温めてきたんだ！ お前にはこの気持ちかわからんのか！」
アナグマ「もう、手遅れか。どうしてあなたはそんなに頑なんですか！ あなたが

その大豆を温めるのをやめさせれば、雨は降り人々は救われるのに！」
帝「だから、それどういう原理？ どういう原理なの？」
アナグマ「あなたはとうしても大豆を温め続けると言うのですか！」
帝「初志貫徹。すてきなコとじゃないか」
アナグマ「そうですが、柔軟さもすてきなコ——キナコ！ これ以上は危うい。これ以上は！ 帝！ 御免！」

アナグマ、帝を切り捨てる。
帝、倒れる。

アナグマ「あ、あ、あ。私はなんてことを」
帝「アナグマ」
アナグマ「すみません、帝。すみません帝」
帝「アナグマ。オカラだをダイズにするんだぞ（気絶する）」
アナグマ「帝おっ！」

アナグマ、咆哮。

アナグマ「私が、私が必ずや、生者を、この手で」

アナグマはける。
帝の母、来る。

帝の母「あら、ミカちゃん。こんなところで寝ちゃって。風邪ひいちゃうわよ。まあ、でも大自然で寝るのって気持ちよさそう。ちよつと隣失礼するわね。ふう。あー気持ちいい！ 自然と一体化してる感じ？ 私は大地。私は世界。あ！ 流れ星！ 見たミカちゃん。流れ星。ミカちゃん？ ミカちゃん？ え、嘘。嘘よね？ ミカちゃん！ いやああああ！」

帝の母、はける。

21場 最後の夢の国へ。

タヌキ「いつまでそうしてるんだよイカナゴ！」
兄「大きな声出すんじゃないよ！ 頭に響くだろうが！」
タヌキ「こうしてる間にもアサリちゃんは——」
兄「じゃあお前が一人で行けばいいだろう！」
タヌキ「それでいいのかわ。良くねえだろ？ 一緒に行こう」
兄「行かねえよ」
タヌキ「なんでだよ。アサリちゃんの事助けたくねえのかよ」
兄「助けてえよ！ なんてあの時逃げたんだらうって。なんで逃げちまったんだらうって、そんなことがずっと頭ん中を渦巻いてるよ」
タヌキ「じゃあなんで！」
兄「もう！ 酒を飲む身体じゃねえんだよ。俺の身体は、もう、酒を受け付けてはくれねえんだよ！」
タヌキ「そんなん気合でどうにでもなるだろ」
兄「震えるんだ。こう杯を持つだけで震えが止まらねえんだ。怖えんだよ。これを飲んでしまったら俺が俺じゃなくなるんじゃないかって、怖えんだよ」

タヌキ「イカナゴ」
兄「ごめんタヌキ。ごめん。ごめん、アサリ」
タヌキ「わかったよ」
兄「ごめん」

タヌキ、背中を向けて何かを削っている。

兄「情けねえ。こんな自分が情けねえ」
タヌキ「しょうがねえよ。なんせ相手はただの酒じゃねえ、神の酒だ。俺らみたいな変態のバカ泥棒じゃどうしようもねえよ」
兄「ごめん、アサリ。天才のハカ泥棒にはなれなかった」
タヌキ「しょうがねえよ」

兄「おめえさつきから何削ってんだ？」
タヌキ「ここは王の墓だ。死体は養分となって新たな生命を芽吹かすさ」
兄「何言ってるんだタヌキ」
タヌキ「神の酒に身一つで戦おうたって俺たちには無理だよ。だから、ちよつと王様の力を借りようじゃないかってね。二日酔いには王の粉だ」
兄「ウコンか！」

タヌキ「王のウコンだ」
兄「ウコンじゃねえか」
タヌキ「昔は王のウコン、今は王のウコン」
兄「王のウコン」

タヌキ「どうだ、イカナゴ。これさえあれば行ける。そうだろ。これさえあれば神の酒にだって勝てるだろ！」
兄「勝てる。これさえあれば勝てる！」

タヌキ「行くんだな。イカナゴ」
兄「ああ、すまない。タヌキ」
タヌキ「よし。こうなってるから勢いだ」
兄「ついでだ！ ついでだぞ！」

タヌキ「よし（自分の杯にもつぐが、残っていない。兄の台詞の間、兄に話しかけようとするが、今一つタイミングを計れない）」
兄「大丈夫だ、俺の身体。震えるな。俺には王の粉・ウコンがある。これさえ飲めばすべての身体の震えは止まり、神の酒に対する恐怖はなくなる。先に王の粉だ。先に王の粉を入れてまるで飲み薬の要領で神の酒をゴクリだ。大丈夫。いける。いけるぞ。いいか、タヌキ」

タヌキ「え、あ」
兄「せーの、でゴクリだ。もちろん一拍あけるからな。一回で決めるぞ」
タヌキ「あ、イカナゴ」
兄「なんだよ、今になってビビってるのかよ。俺は覚悟を決めたぞ。こういうのは勢いで行くのが一番だ。行くぞタヌキ」
タヌキ「あ」
兄「せーの」

二人、飲む。
オ一プニング3。死者たちが出てきて、イカナゴだけを連れていく。その姿は亡霊の様。

兄「ん？ ん？ タヌキ？」

タヌキ「お前の分まで最後だったみたいだ」

兄「え、言ってみようよ」

タヌキ「最初からこうなるってことだったんだよ」

兄「おい、タヌキ」

タヌキ「安心しろ。俺はここで待ってる。イカナゴ、お前の帰りを、この王の墓で」

兄「ああ、待ってるタヌキ。俺は天才のハカ泥棒だぜ」

タヌキ「妃ちゃんに会ったら、よろしく言って言っておいてくれよな」

兄「ああ、あることないこと伝えといてやるから、安心しろ！」

タヌキ「イカナゴ」

兄「タヌキ」

兄・タヌキ「あばよ」

転換

2 2 場 アナグマと帝の母のシーン

アナグマと帝の母。

帝の母「ミカちゃんが、ミカちゃんが」

アナグマ「申し訳ありありませんママ様。私が必ずや、生者をこの手で仕留めて見せます」

帝の母「ミカちゃんが、ミカちゃんが」

アナグマ「あれもこれも、生者のせいす。神の酒の生です」

帝の母「ミカちゃんが」

アナグマ「奴らはここで待ってれば必ず来ます。しばらく身を潜めていきましょう」

帝の母「誰か来ました。ママ様、隠れてください」

帝の母「ミカちゃんが。ミカちゃんが」

アナグマ・帝の母、身をひそめる。

2 3 場 兄が妹を探すシーン

兄「どこだ。どこなんだアサリ。教えてくれ。ここはどこなんだ！ 迷子だ。暗い！ 怖い！ くそつ。昼間に目印になっていたものがこんなにも目印にならないなんて！」

歌が聞こえてくるのかもしれない。

ねんねんころりよ おころりよ
ぼうやに毒もりや おころりよ
ぼうやのお守りは どこ行った
あの山こえて 里へ行った

歌の中、シーンは進んでいく。

兄「この歌。こっちか」

怪しい影が、小屋のカギを開けようとしている。

アナグマ出てくる。

アナグマ「そんなところで何をしている」

影が反応する。

アナグマ「お前たちの生だ。お前たちが無茶苦茶にした。御免」

アナグマ、影を斬る。

アナグマ「もう一人いたはずだ。もう一人はどこに—— 妃様？ 妃様、何故！」

妃「ごめんなさいね、アナグマさん。こんなことしたら、タヌキさん、喜んでくれるかなって」

アナグマ「妃様。妃様」

妃「タヌキさんからもらったお手紙の返事、渡せてなかったから」

アナグマ「違うんです。こんなはずじゃなかったんです。こんなはずじゃ」

妃「タヌキさんが来たら、よろしく言っておいてくださいね」

アナグマ「ああ！ 妃様！ 妃様！」

アナグマ、咆哮。

帝の母、森を彷徨っている。湖を目指している。

帝の母「ミカちゃんどこー。ミカちゃんどこー」

兄「あった。小屋だ。この歌はあの小屋から聞こえてくるのか？ アサリ？」

妹「イカナゴ、さん？」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「アサリ！」

妹「アサリ！」

兄「う。う？ う、嘘つきは本当のことを言わない」

やや間

兄「い」ね？ い、、、」

薄く揺らいでいた記憶が実体を持ち始める。

兄「いつの間にか、アサリがいたはずの扉の向こうからは音がしなくなった。「た」。「た」？ただ俺は、その場所にずっと座り続けることしかできず、いつかは開けるであろう夜を、いつかは射すであろう日の光を待ち続けた。「た」。たとえようもないほど長い時がたち、ようやく扉が開かれた。たつた今扉を開けた人は、中を少し見ると、まるで見てはいけないものを見たかのように走って逃げて行った。ただ俺は開いた扉の前でそのままずっと座り続けた。躊躇いなく開いた扉からアサリが、妹が、今にも出てくるんじゃないかと、出てくるはずだと、何度も何度も自分に言い聞かせた。たわんだ扉からは今まで嗅いだことのない香りが、明らかにこちらの世界のものではない何者かの香りが、ゆっくりと霞のように流れていた。たまらず俺は「アサリ？」と問いかけた。助けを求めるように何度も何度も、問いかけた。ただ、いつまでたっても返事はなかった。耐えることが出来ぬほどの時間が経ち、俺は自分のものではなくたってしまった脚に上半身を乗せ、ゆっくりと立ち上がった。たわんだ扉から少しずつ少しずつ顔を出し、俺は向こうに広がるあちらの世界を覗き込んだ」

兄、慟哭。

兄「妹は、アサリは、俺が背持たれていた壁に張り付くようにして死んでいた。俺は部屋を隅々まで払い清め、香を焚いた。焚かれた煙は俺に付き纏い、宙を漂い、部屋を埋めた。それから三七日（みなのか）、かろうじて妹の魂はそこにあった。四七日（よなのか）が過ぎ、時々しか感じられなくなった。そしてついに七七日（なななぬか）。こんな場所では人が死んではいけないと、そんなことはあつてはならないと、アサリは、俺の妹は、犬として、葬られた」

帝の母・アナグマ・妃、身を投げる。

25場 洪水のシーン

洪水が起る。
死者たちは波となり、舞台を包んでいく。
帝、目覚める。

帝「ふぁり。納豆が、守ってくれたのか。ん？ 何の音？ いつもの3倍くらい気持ちよく寝てたのに。あ！ すごい。海だ！ 海が広がってる！ ママ、海だよ！ ミカちゃんね、一回泳いでみたかったんだ！ お魚さんみたくに、スーって。アナグマ！ ミカちゃんに泳ぎを覚えてくれよ。お魚さんみたくにスーって泳ぎたいんだ！ 妃ちゃんと一緒に泳ぎを覚えて？ 一緒にお魚さんになって泳ぐんだ。じゃあね、妃ちゃんね、チョウチンアンコウね。知ってるチョウチンアンコウ。チョウチンアンコウってねオスがメスの身体にくっつくんだ。くっついて離れないんだ。ずー

つと一緒なんだ。アナグマはね、昆布。出汁がうまいんだあ。それでねそれでね、ママはね、サメさん。ママはサメさんね。サメって早いんだぜ。ビューって行っちゃうんだから。でもねサメの周りにはいろんなお魚が一緒に泳いでるんだ。みんなを守ってるんだ。それでねそれでねミカちゃんね、え、なんだろう、ミカちゃんなんだろう！ ねえ、ママ。何がいいかな。ミカちゃんは、何のお魚さんがいいかな。あ！ あれ？ できた！ 納豆ができたよ、ママ！ うわあ。かわいいなあ。これが生まれたての納豆かあ。小っちゃくてやわらかい。ひきわりなのかなあ。あ、お前糸出すなよ。どうしたの。お腹減ったの？ 待ってろよ。今醤油、飲ませてやるからな。いっぱい醤油のんで、いっぱい大きくなるんだぞ」

帝、波になる。

世界は水に沈み、兄と妹は、生者と死者は一つになる。太古の海。生命の源。

兄「アサリ？」

妹「やっと会えた」

兄「そうだな。やっと、やっと会えた」

妹「ねえ、お兄ちゃん」

兄「ん？」

間

兄「ああ。覚えてるよ」

兄と妹は波になつていく。

26場 おわりのシーン

舞台には何も無い。
中央にタヌキが座っている。
線を掘っている。

タヌキ「なあ、イカナゴ。明日を思い煩うことはねえ。どうせ明日、俺たちはこの古い住まいを去り、1億年の故人と共に旅をするんだ。だからよ、俺たちは、この一瞬の楽しみをとるんだ。なあ、そうだろう？」

タヌキは酒を飲む。

溶暗。

(完)